

## 駒場の土地と建物の歴史

藤森照信\*

生研が移転する駒場の新キャンパスの土地と建物の歴史について書いておきたい。

このたびの新築工事において、土器や炉跡や石器の類が出ていないことからみて、縄文時代や弥生時代まで人間の生活史がさかのぼる場所ではなかったようである。おそらく多くの武蔵野の台地と同じように、長い長い間、原生林のままに経過し、そしていつしか人の斧も入るようになり、雑木林として江戸の開府を迎えたということであろう。

江戸に幕府が置かれるようになってから、江戸の周辺に広がる武蔵野の台地には急速に人手が入ってゆく。正確には人手の入る率が急速に増加する。建材に使えるような太い木は伐られ、細い木や雑木は江戸のエネルギー用としてマキになり炭に焼かれ、下草は牛馬のマグサ用や田畑の肥料用に刈り取られる。さらに、開墾のクワが入って田畑が変わってゆく。

こうした江戸開府を震源として起った武蔵野台地の変貌の津波は、しかし、この地を孤島のように置き去りにして進んだ。これまで入ってきた斧も鎌も、以後は、入ることを禁じられたのである。もし、入っていたなら、やがて二十世紀を迎えた時、細分化されて郊外住宅地となり、大学のキャンパスとはなり得なかったであろう。

江戸幕府は、この地一帯十六万坪の開墾を禁じた。木を伐ることも草を刈ることも、もちろん鳥獣を捕ることも禁じた。もし禁を犯せば死罪はまぬがれなかったろう。なんのために厳しく自然保護的に扱ったかという点、將軍の狩場とするためだった。

《駒場野》とか《駒場原》と呼ばれ、松が枝を伸ばし、下草には笹が茂り、その笹の中を鶉（うずら）の親子が走る。そんな土地となった。

「將軍が馬上に、軍扇を振られ、共奉の面々には何れも華やかな狩服を着けて勢子を驅つて鶉を追い出し之を網にて攫へ捕ふので、如何にも壯快なことである、終つて諸士の乗馬を覽るを例とした。當日雲の如く集つた多くの騎馬武者が紅紫取り、装ひにて縦横に廣野を駈廻る光景は、ナカナカ勇ましきものであった」（『東京府荏原郡誌』）。

駒場という言葉からは、良馬を飼育した牧場が思い浮かぶが、同じ駒でも、生産ではなくてお披露目の駒場だったのである。当時、馬は今日の車にあたるから、F-1レース場をイメージした方がいいかも知れない。実際、「駒場野の鶉狩といへば頗る振つたものであつた」（前出 同）

そして、明治維新を迎え、江戸幕府の所有地は明治の新政府に移管されるが、駒場野ももちろん引き渡された。そして、新政府は、明治十一年この地に、《農学校》を新設する。現在の農学部の前進で、工学部の前進の工部大学校が地名にちなんで「赤坂の工部大学校」と呼ばれたように、「駒場農学校」と通称された。

農学校の施設は、校舎群と農場からなり、校舎群については、アメリカ系の木造建築（木造下見板張り）であったことが、国立公文書館所蔵の建築図面から知られる。

校舎群は現在の教養学部の位置にあり、生研の移るあたりは農場であった。明治十三年の地図でみると、整然と区画された農場になっていたことが知られる。といっても、すべて畑や牧場になっていたわけではなく、松をはじめとする林は残されていた。

そして、大正十二年、関東大震災が起こる。その復興にあたり、東大のキャンパスに一大変化が起こる。駒場の農学部が本郷キャンパスの弥生町地区に移り、そこにあった一高が駒場へと移る。加えて、本郷キャンパスの本郷三丁目側角にあった前田侯爵家は、土地を大学に譲り、駒場へと移る。

本郷キャンパス全部が、元々は前田家の屋敷であり、明治になって邸宅部分を除いて大学敷地となり、地震を期に、すべてが大学用地へと変わった。この移出にあたり、政府は前田家に対し、駒場の旧農学校地を、“好きなだけ取らせた”と伝えられている。

前田家が東京郊外に数ある国有地の中からなぜ駒場を選んだのかについて、移転を決めた前田利為侯爵の娘の酒井美意子さんから話を聞いたことがある。

「父は乗馬が大好きで、それで好都合の駒場を選んだ、と聞いております。当時の駒場は武蔵野のまま、よく遠乗りをしました。駒場の屋敷の周囲には加賀藩時代からの家来の人たちの家を取り囲むように並んでいましたが、今は、普通の家になっています」

將軍の狩場から農学校（農学部）へと変遷してきた土地には、震災を境に、一高が移り、その西に前田侯爵家が入り、そしてさらにその西側に入ったのが、本学付属の航空研究所である。

航空研は、深川の越中島町に設立され、施設は大正十年以来順次建設されている途上であったが、関東大震災で全焼し、復興計画に取りかかった。

「當然起こるべきは敷地の問題なり、本研究所の越中島町の敷地は海岸埋立地にして、従来と雖も精密なる機械類が汐風によりて故障を生ずるなどの不便もあり、(略)他に新たな敷地を選定するの必要を見るに至りたり」(「航空研究所復舊工事概要」『建築雑誌』昭和六年六月号)

そして、農学部付属農場の一面に移転再建することになった。

工事は、大正十五年八月、風洞部研究室からはじまり、昭和六年三月末に完成する。

「新敷地は農学部附属農場の西北隅約三萬坪にして、土地廣濶、眼界遠く開け、閑靜にして利便、敷きの緑に恵まれたる土地にして、蓋し研究所敷地としては理想に近きものならん。敷地の北側に沿ひし道路に面して中央に正門を設け、正門の後方約100米の所に本館を配置しこの二者を結ぶ直線を軸として左右略對稱に各研究部の建物を配置せり。之等建築の總面積は12,929.90平方米にして總數十二棟より成り各建物は將來廻廊を以て相互連絡せしめ得ることを考慮してある。

建築はその構造を耐震耐火的の見地よりして、鐵骨を有する、又は有せざる鐵筋コンクリート造とし、外觀に就いて四圍の環境に調和せしむることに留意して過去の建築様式に拘束せられざる自由の様式のものとしり。

建築物の種々なる平面、形状に就いては専らその用途に關係を持つものとし、勾配屋根を必要とするものには引掛棧日本瓦を使用してその色調に就いては力めて穩健を旨とせる有色タイル及一部の石材を使用し、特に本館は各建物の中樞となるべきものなるを以て時計塔を有し、階數に於て首位を占むる外、外部の色調も比較的強調し、莊重なる趣を出すことにつとめたり。

各建物の周圍には植樹帯を配し、その間を舗裝し、猶構内要所に並樹芝地等を設けて、樹木花草等の植栽をも行ひ、自然の情調を失はしめず、快適なる近代的研究所たらしむことに力めたり。」(前出「概要」)

設計は、本学営繕課の内田祥三、清水幸重、大沢邦吉、桑田貞一郎、大村己代治、奥田芳男である。内田は、言うまでもなく工学部建築学科の筆頭教授を勤める建築家であり、営繕課長を兼務して本学各キャンパスの震災復興をリードした人として知られる。

これらの完成した建築群の特徴について述べてみよう。

まず全体の配置は、前出「概要」に記されているように、「左右略對稱に各研究部の建物を配置せり」。入口から塔のそびえるシンボリック建築に向かって軸線を通すという全体計画は、本郷キャンパスのやり方であり、安田講堂の代わりに本館建築を置いてみれば分かりやすい。内田祥三好みの配置計画であった。

各建物のデザインについては、「概要」に、「過去の建築様式に拘束せられざる自由の様式」と説明している。ここにいる過去の建築様式とは、ギリシャとかゴシック、ルネッサンスといったヨーロッパの歴史的な建築様式のことであり、二十世紀においては、それらの歴史的様式は定形化して手本となり、そうした歴史的様式をベースとする設計は《歴史主義》と呼ばれていた。「過去の建築様式に拘束せられざる自由の様式」とは、歴史主義を採らないという意味である。

今から見ると当然のことだが、昭和初期は世界も日本も保守本流としての歴史主義陣営と新興勢力としてのモダニズム陣営が争っている最中であった。このデザイン上の争いは、あくまでデザイン上に限られるのだが(ヨーロッパはデザインに限定されず全面的争いになっていた)、本学の復興計画の中にもあった。それを象徴していたのが安田講堂で、内田祥三の基本設計はゴシック様式であったが、弟子で助教授の岸田日出刀は、それをベースにしながらも、細部の線を巧みに変えて、全体の印象を表現派に変えて実現してしまう。表現派とは一九二〇年代にドイツで隆盛したモダンデザインのひとつで、昭和初期のモダニズムの母体のひとつ。表現派からモダニズムへという形で、大正から昭和初期にかけての日本のモダンデザインは推移している。若い岸田は、師の内田の歴史主義に納得できなかったのである。

愛弟子のやったことだから内田は認め、岸田の修正は実現したけれど、安田講堂につづく記念碑的建物の総合図書館の設計にあたっては、内田は弟子たちが勝手に修正しないよう、細部まで自分でちゃんと描いて、ゴシック様式を実現した。

以上は岸田の弟子の吉武泰水先生の回想だが、このことを念頭に置いて、「概要」の説明を読んでみると面白い。筆頭設計者の内田祥三の好きな歴史主義ではなくて嫌いな「自由の様式」でやったと明記しているのである。おそらく、営繕課の若い世代の建築家たちは、内田の好みをよく知りながらも「自由の様式」を実行し、上司の内田は、若いスタッフのやることだから仕方ないと認めたのだろう。

このように、航空研究所の建物は、歴史主義によらない「自由の様式」によったのだが、しかし、昭和初期の「自由の様式」の最先端を走っていた“白い箱に大きなガラス窓を開いた”デザインをやったわけではない。大正期の表現派のデザインがまだ色濃く残っている。その意味では実現した安田講堂に近いと言っている。

表現派は、モダニズムの平坦で白っぽい壁面とはちがいで、陰影の濃い毛深い壁面を好んでいるが、その好みは航空研の建物でも表れ、スクラッチ・タイルが使われている。表

面をスクラッチ（竹の歯の櫛で引っ掻いた）した厚手のタイルのことで、大正十二年完成の帝国ホテルでフランク・ロイド・ライトが開発し、以後、広がっている。

スクラッチ・タイルは、本郷キャンパスでも主要な仕上げ材として使われている。歴史主義の内田も好み、表現派の岸田も好んだことから分かるように、新旧両陣営に支持される珍しい仕上げ材だったのである。あるいは内田は、

「自由な様式」であろうともスクラッチ・タイルを使うかぎり許していたのかもしれない。その意味では、航空研の建物を象徴するのがスクラッチ・タイルと言ってもいいであろう。

\*第5部教授